

市長賞

賞	短歌	俳句	川柳	狂俳	詩旅
一般の部	妻のこと息子と話しあわぬままもう夕まぐれ任地へもどる	鳥雲に平和託して兜太逝く	開いたら愛ほとばしる母子手帳	春一番 スカート抑えペタル踏む	(たび)
住所	春日井市	春日井市	春日井市	春日井市	春日井市
氏名	笠井 忠政	山城屋 博子	松井 八重子	井上 清美	武山 明彦

賞	短歌	俳句	川柳	詩
小・中学生の部	青い空手のぬくもりや鳥の声アンドロイドは知るのだから	力込め梅雨の晴れ間に打つ一球	わすれないあの夕焼けと親友を	この窓から
学校名・学年	高蔵寺中学校 二年	高蔵寺中学校 一年	勝川小学校 六年	押沢台小学校 四年
氏名	小林 珠奈	水野 小愛	渡邊 歩	成瀬 杏夏

【詩】 一般の部 市長賞

旅（たび）

春日井市 武山 明彦

小さな駅舎の前に
自転車が一杯
雪国の春を告げる小さな広場
遠くの山並に斑雪が残る
高校や中学のプレートがついた自転車
駅の近くに自転車屋があつて
おじさんが大忙し
おじさんおはよう
おじさんが何か言うと
女子生徒達が笑い声でおじさんに何か話しかけては通る
あの自転車錆びてるな
おじさんは錆を磨いている
漬物小屋で冬を越した自転車だよ
塩気で錆びるんだあさ
ぼくの隣りの席が教えてくれた
一メートルもあつた雪はすっかり消えた
二輛連結の電車が着いた
お花畑の絵が描いてあるポデーは春だ
中高生の話し声や笑い声がどっとはき出された
かたまりが道にそつて二列三列に延びると
学校への狭い道は大きくふくらんだ
花模様の電車と反対方向へ
ぼくをのせた電車は動き始めた
上り電車の到着を待っていたのだ
レールの継目を乗り越える車輪の音が軽快にリズムを刻んだ
残りの乗客は次の温泉駅で大方降りた
ぼくもその一人だ
駅のホームから湯煙で煙る小さな川添いの古い旅館が見えた
予約のないぼくに宿の余裕はみつかるか
時の流れに身を任せる旅は自由と言えるか
勝手に反応する脳のように
春を感じて
菫が荅を開いていた
東北の桜は
芽がまだ固い

【詩】 小・中学生の部 市長賞

この窓から

成瀬 杏夏

今日はこの窓から何が見えるだろう

そういえば、前は海が見えた

青く透き通っている海

太陽の様にかがやき

ここから見てもまぶしかった

橋の上からの景色もきれいだった

船が窓のすぐ下を通り

まるで海の上を飛んでいるみたいだった

別の時には、深い緑の山が見えた

窓を開けると外はうるさいほどのセミの声

山の草木も暑苦しいほど生いしげっていた

その時、高く大きな石垣が近づいてきた

窓から上を見ると

お城が座ってこちらを見おろしていた

山をぬけると大きな町が見えた

たくさん高いビルが建ち並び

その中をくぐりぬけていく

窓のすぐ外をすごい速さで

街並みが走りすぎていった

この窓は今まで見たことのない

すばらしい景色を見せてくれた

父と母が前にすわり

またこれから旅に出る

今日も 明日も これからも

きつとこの窓はすてきな景色を

見せてくれるだろう